

チョーサー研究

STUDIES IN CHAUCER

文学博士 梶井迪夫著

チ ョ ー サ ー 研 究

昭和 37 年 7 月 20 日 初版発行 昭和 45 年 12 月 20 日 3 版発行
昭和 48 年 1 月 20 日 増補第 1 版発行

著 者 梶 井 迪 夫
発 行 者 小 酒 井 益 藏 東京都新宿区神楽坂 1 の 2
印 刷 所 研究社印刷株式会社 東京都新宿区神楽坂 1 の 2

発 行 所 研究社出版株式会社 〒 162
東京都新宿区神楽坂 1 の 2
振替口座東京 83761 番

定 価 2,000 円
3098-410087-1860

は し が き

かつて F. J. Furnivall は、Chaucer は愛される詩人であるといった。まことにその言葉のように欧米に Chaucer の愛好者は今日にいたるまであとをたたない。私もまたこの詩人の不思議な魅力にとらえられてもう何年かその作品に親しんできた。親しむほどにその魅力はまし、読むほどに新しい魅力がうまれる。それは何故であるのか私にはよくわからない。ひとつは発見的な魅力であるのかも知れない。どのようなアプローチをも許容するこの詩人の寛容がわれわれを魅するのかも知れない。人をよせつけない孤高の天才ではなく、炉辺でともに語りあえるような心の暖かさを漂わせるこの寛容の詩人がわれわれを魅惑し、その仲間 (compaignye) になりたいと願わせるのであるのかも知れない。そのいずれでもある。

読むたびに私はそのような経験を実感し、詩人に教えられながら自分の遅い歩みを続けてきた。ことに詩人の言語にたいする発見的な魅力を、たといそれが小さい現象であれ、他の人が今までにどこかで言っていることであるにしても、私は自分なりに感じてきた。浅学な者が発見的などというのはおこがましいかぎりであるが、それにもかかわらず、あのこと、このこと、など小さいことから大きい問題にいたるまで、読むたびにその作品と言語とが新しく教えてくれるように思われた。それは今も変らない。その作品や言語はいわば「実験による証明」——それはこの詩人の言葉である——を要求しているかのごとく私には思われる。そのような実験的な探索を試みる間に私は自分のわずかな英語学と Chaucer 学の教養を投入することを心がけてきた。それが私の小さい英語学であるのかも知れない。それは Chaucer を読むことのうちに自らの英語学をつくるとでもいえるのか。しかし私の印象は、私の英語学の方法も知識も Chaucer の中に吸収つくされ、なおそれは対象の一隅をさえついてはいないということである。もし巨大な英語学の知識をもって Chaucer に迫ったと仮定しても、はたして Chaucer の言語の全貌がきわめつくされるだろうか、今の私には疑問に思われる。このような印象からででも、論からの英語学で

なく、物、すなわち、事実、からの英語学が十分の存在理由をもつことができると信じる。Chaucer は自らの言語の ‘exploration’ を待ってわれわれの前に立っている。この詩人は多くの微妙な未知なるものを隠している。再読から三読への興味をそそられるのはその未知なるものが或いは開顕され、解釈し直されるかも知れないというひそかな期待のためでもあるといえる。不思議な魅力である。

本書は、過去十年ばかりの間に私の試みた小さい実験的な論文を集める意図をもって編集しはじめたのであったが、年代順に集めてゆくうちに、その中の一論文を拡充したい欲求を感じ、書き改めてゆく間に、始めの意図とはまったくかわったものとなってしまった。ことにこの詩人の展開を作品の読みを通してあとづけ、私なりに詩人のイメージをえがいてみた第一部「Chaucer の生涯と作品の展開」の部分である。これはいかにして詩人は *The Canterbury Tales* の世界へ到ったかという問題に集中している。それは幼稚な考えであることを恐れるが、しかし私が詩人から教えられた展開する詩人の映像である。

第一部は、こうして、旧稿を拡充しつつ、書き改めた「詩人の精神的な展開」を扱った部分から成る。第二部は主として詩人の言語と表現の問題について今まで発表した邦文の四つの研究論文を発表の年代順にならべた部分を中心として、それにこれらの論文にたいする序説を第一部との関連をも考えながら三つの角度からあらたに書き加えたものことから成っている。第三部は Chaucer 学にふれて私なりに歩んできた Chaucer 理解の道筋を辿った二つの紹介的論文から成る。いわば自分の研究のための覚え書であるけれども、もしこれらの紹介の一端でもこれから Chaucer を読もうとされる方々に少しでも役立つならば私の非常な喜びである。ここでは 19 世紀の終りから 1950 年すぎまでの約半世紀の主要なスカラシップの傾向が扱われているが、それ以後、D. S. Brewer, *Chaucer* (1953); D. Everett, *Essays on Middle English Literature* (1955); Nevill Coghill, *Geoffrey Chaucer* (Writers and Their Work: No. 79) (1956); J. A. W. Bennett, *The Parlement of Foules* (1957); C. Muscatine, *Chaucer and the French Tradition* (1957); P. F. Baum, *Chaucer: A Critical Appreciation* (1958); Sanford Meech, *Design in Chaucer's Troilus* (1959), 等々、つぎつぎと英米のスカラシップは充実し、また欧米の学術雑誌に有益な論究がたえず発表されつ

つある現状である。1940 年から 1960 年までのスカラシップの傾向については *Anglica* No. 20 (1962) に寄稿した「チョーサー学の最近 20 年」においてとり扱った。これは第三部の続篇となるものである。ただ、本書で *The Canterbury Tales* の解釈に全力を傾倒することができなかったのは残念である。それは自分の研究の未熟と経験の不足のためで、何年か後には是非とも果したい念願である。本書は私の Chaucer 研究の一つの里程標であるのにすぎない。数々の欠点や未熟な考えが処々にあるにちがいないことを恐れるものであるが、もし御批判と御教示をいただくことができれば望外の喜びである。

この本をまとめるにあたり、一々拙稿に眼を通され本書の構成から内容にわたり数々の御忠言を賜わった山本忠雄先生、また数年前に熱心に本書の出版のおすすめをいただいた大塚高信博士にたいし心から感謝の意を捧げる。また本書における Chaucer の引用の ‘gloss’ は、Yale 大学英文学部大学院研究科長 E. T. Donaldson 教授のお許しをえて、その近著 *Chaucer's Poetry: An Anthology for the Modern Reader* (1958) から多くの参考をえ、自由に使用させていただく光栄をもった。ここに記して深い感謝の意を表する。

なお、原稿の浄写をお願いした熊本商科大学講師明石喜嗣、神戸市外国語大学講師須藤淳、及び索引作製をお引受け下さった広島大学講師湯浅信之の諸君の労にたいし厚く御礼を申し上げる。

さいごに、本書の出版を御快諾いただいた研究社出版株式会社社長小酒井益蔵氏、かずかずの御親切をいただいた研究社辞書部長植田虎雄氏にたいし深甚の謝意を表する。

1962 年 2 月 20 日

広 島 に て

榊 井 迪 夫

増補版 序

本書が 1962 年に出版されてから 10 年が経過し、3 度版を重ねた。この度ふたたび版を改めるにあたって、とくに第 3 部 Chaucer 研究史の部分を拡充して、幾分でも Chaucer 学の進展におくれないようにつとめた。初版で扱った研究史はその「はしがき」でも述べてあるように 19 世紀の終りから 1950 年すぎまでの主要な スカラシップの傾向が扱われている。この版で増補された研究史では 1950 年代から 1970 年までの主要な傾向が扱われる。読者の御参考になれば著者の非常な喜びである。なお、この際に Select Bibliography も 1972 年まで追加し拡充したこともおことわりしておく。

1972 年 7 月 21 日

広島にて

梶井迪夫

目 次

はしがき	iii
作品略語表	ix

第 一 部 Chaucer の生涯と作品の展開

序 説	3
I. 教養と経験を通して作品の形成へ	7
i. 言語的・社会的環境	7
(1) 言語的環境——ロンドンの英語	7
(2) 社会的環境——Chaucer の少年時代とロンドン	11
ii. 文芸的教養と宮廷の経験	17
青年時代の宮廷の雰囲気——宮廷愛の伝統 <i>Le Roman de la Rose</i> の翻訳	17
iii. 宮廷愛の最初の作品 <i>The Book of the Duchess</i>	26
iv. 教養の拡大と人生の経験 イタリア旅行	35
v. 作品の展開と詩法の探究	41
(1) 抒情詩から <i>The House of Fame</i> , <i>The Parliament of Fowls</i> をへて <i>Troilus and Criseyde</i> へ	41
(2) 詩法の探究	44
II. 愛の探究から人間の探究へ	46
i. 「愛の知らせ」を求めて <i>The House of Fame</i>	46
ii. 「愛のわざ」——天の愛と地の愛 <i>The Parliament of Fowls</i>	55
iii. 愛と運命と神の哲学 <i>Boece</i>	68
iv. 宮廷愛の悲劇——性格創造への関心 <i>Troilus and Criseyde</i>	81
v. 宮廷愛の世界から経験の世界へ <i>The Legend of Good Women</i> から <i>The Canterbury Tales</i> へ	154
vi. 経験の世界 <i>The Canterbury Tales</i>	161

第 二 部 Chaucer の言語と表現

I. Chaucer 統語法の性格	181
i. 語の遊離性と WORD ORDER	181
ii. 統語的単位と語の固定化	187
II. 韻律的統語法から口語的統語法へ	192
i. 韻律的統語法——言語の韻律的構造	192
ii. 口語的統語法——Speech	200
III. SPEECH としての Chaucer の英語	203
IV. Chaucer の SPEECH	208
V. 修辞法から文体へ	219
VI. Chaucer における表現の反復	229
VII. Chaucer の表現の世界	249

第 三 部 Chaucer 研究史

I. 語学的研究	275
1. 1900 年までの Chaucer Scholarship	275
2. 1900 年以後の Chaucer Scholarship	280
II. 解釈・批評的研究	305
1. 歴史的環境の研究	305
2. 解釈・批評の推移——年代的に	308
3. 作品研究	317
4. 解釈と研究の新しい方向	323
5. 結 び	329
III. 続 Chaucer 研究史	331
1. Chaucer 学の最近 20 年	332
2. 中世英文学における Exegetical Approach	343

3. Chaucer 解釈へのバランス	347
4. Chaucer 批評のシンポジウム	352
5. 最近の Chaucer 研究——主として 1965-1970——	355
SELECT BIBLIOGRAPHY	385
TABLE OF CONTENTS	393
INDEX	397

第 一 部

Chaucer の生涯と作品の展開

All is growth, evolution, *genesis*.

—S. T. Coleridge

序 説

Chaucer がどのような教養と経験を背景としてその作品をつくりあげたか、その天才の展開は如何にして可能にされたか、という課題は、Chaucer を研究する人にいぜんとして誘惑的な課題である。

われわれにとって意味深い遺産はその作品である。その中に彼の教養も経験もすべて投入されている。そしてその作品の系列は彼の天才の展開を語っている。この作品群をわれわれの主要な足場とすると、まずその作品のかもしれない霧囲気が直接に読者の映像となつて残るであろう。作品に漂うその霧囲気の織りなす複雑なタペストリーのより糸をほぐしてゆけば、この詩人の教養的なものとその中心に鮮やかに織りなされている集中的な画像——詩人の興味の中心——に気づくであろう。その画像は、詩人の教養が深められ、経験が豊かになるにつれて、色合を異にし、その陰影が微妙となり、深くなる。教養と作品との内面的関係がこの詩人くらい密接である詩人はおそらく少いであろう。その作品の中から想像される詩人の読書の経験とその量を調べた或る学者は、その範囲はほとんど宇宙的であると言ったほどである。¹

そのような内面的な世界はその作品が暗示している。それは Dover Wilson が *The Essential Shakespeare* において Keats の言葉を引用して、

“Shakespeare led a life of Allegory : his works are the comments on it.”

といっている意味にも通じる。Chaucer の場合は、Shakespeare 以上にその経歴の正確な断片が日付を付した王室記録によって残されている。しかしやはり記録や文書に現われないブランクは想像にゆだねざるをえない。Chaucer もまたいわば ‘a life of Allegory’ をおкуったといえないこともない。明るみにだされたこの詩人の公的生涯は、たとい断片的であると

1. R. R. Purdy, ‘Chaucer Scholarship in England and America,’ *Anglia*, Bd. 70, Heft 4, 1952.

でも、詩人の内的展開を考察する上で貴重である。最近までの Chaucer 学でほとんど確実視される彼の生涯の断片を要約的に結びあわせてみるとつぎのようになるであろう。¹

「Chaucer は、裕福なぶどう酒商人 John Chaucer とその妻 Agnes との間に、1345 年ないし 1346 年² の頃に、おそらくロンドンに生れ、11 歳か 12 歳の頃、Edward III の第三子 Lionel 伯の妃 Ulster 夫人 Elizabeth の小姓となる。二年後に英軍に従軍し、フランスにあり、Reims の近くで捕虜となる。その身代金として王より 16 ポンドが支払われる。1366 年までに Philippa Roet と結婚。彼女は Edward の王妃 Philippa の侍女。Katherine Swynford の姉妹。1367 年、すなわち、21 歳ないし 22 歳の頃、王室に宮内官（‘valectus’）として仕え、二年後に ‘esquire’（騎士見習い）となる。1369 年に Lancaster 公爵夫人逝去。9 月にその哀悼詩をつくる。1370 年に外交の用務をおびて大陸へわたる。以後八年間、王の諸種の用務にあずかり外国へ旅行。1372 年、イタリアのゼノアとフロレンスにあったことは確実、ついで 1374 年、年額 10 ポンドの俸給をうけて羊毛類、皮革類などの税関監査長、ついでぶどう酒類の小税関（Petty Customs）監査長を拝命、この公務により、商業界の人、あるいは貿易商人と接触。一方、宮廷との関係はつづく。さらに外国旅行。ロンドンの Aldgate の塔上の居室と地下室を修繕の義務を条件として無家賃で借用。1380 年 ‘raptus’（rape か）と称する訴訟事件で訴えられる。1381 年、農民一揆の大事件あり。1386 年に Kent を代表し議会に席を有し、のち Kent に隠栖。1387 年、妻 Philippa の死。1389-91 年 Windsor および他の宮殿の修理工事官。1390 年 North Petherton の林野官。1399 年 Westminster の St. Mary's Chapel の庭の家を長期、借りる。1400 年 6 月、最後の年金支払記録。1556 年建立の墓碑によれば、同年 10 月 25 日死す。」

これは Chaucer の公的な生涯である。この公的な世界が内面的な世界と一応区別されながらも、作品と無関係であるとは思われない。むしろ、その公的な世界に許されうるかぎりの想像を、逆に、眼前にある作品の側からめぐるとき、その外的な世界も新しい意味をおびてくる。彼が教養と経験を獲得していった過程が作品の展開の中に正直に現われているので

1. P. F. Baum, *Chaucer: A Critical Appreciation*, pp. 4-5 に基づく。

2. 生年については p. 7 の注 (1) を参照。

はないかとわれわれは感じる。この前提に立つとき、彼の読書と人生の経験はいっそう深い注意を与えられなくてはならない。しかし教養的な知識はあくまで知識である。それはいかにして作品という形に‘transform’されるのであろうか。彼の作品はこのような創作の秘密へわれわれを誘う多くの要素と魅力をもっている。この意味において Chaucer がロンドンですごした少年時代から Westminster における宮廷生活、さらに外国旅行、税関勤務、数々の役職の経験、などはいわば Chaucer をとりまく重要な環境であるといつてよい。その環境の中で彼は言語的、文藝的な教養や日常的な経験を身につけ、同情を以て人間を観察したのである。しかし、そのような環境は、はるかな時代の、われわれの文化とは異質的な伝統をもつ中世ヨーロッパの文化的環境である。その中へ確かな想像力をもつてはいつてゆくことは困難な作業であると言わざるをえない。われわれは多くの研究家の客観的な知識や発見にたよってそうした環境を再構成しながら、中心の課題として作品の詳細な読みを通してうつしだされる詩人 Chaucer の内面的に複雑な精神的展開のあとを辿ろうと思う。

詩人の作品の世界がわれわれに教えることは、はじめに詩人の強い関心が宮廷愛の問題に集まっているということである。それは詩人の宮廷的な環境を反映しているとともに、詩人の教養——書物の教養の方向を暗示する。まず彼の教養の中心は「愛の知らせ」を探求するという形をとって作品に展開される。「愛の知らせ」は古典の愛の物語の中にかずかず語られている。詩人はそれをあくことのない‘gusto’をもって探し求めてゆく。それがしだいに愛のことを思索する詩人の内省的な姿に変わる。現世の愛はロマンスの世界の愛である。古典の中に探し求めた愛の知らせはこの宮廷愛の物語であった。愛はもっと深い意味、もっと高い秩序につらなる。天の愛がそれである。詩人は、現世の愛と天の愛とをあるいは融合する世界を望みみていたかも知れない。それは、もはやたんなる愛の物語に単純な喜びを見だしたかつての詩人ではない。宗教の世界において愛を考える詩人である。その動機となるのは、Troilus という一個の古典の物語の人物にそそがれた詩人の人間的な同情を通してであった。異教の Troilus の魂は救われねばならない。この魂の救済の問題は詩人に宮廷愛の世界へ訣別をうながす契機となる。そしてキリストの愛の世界へ深く参入する詩人となるのだ。そのような精神的な道程が中世のコンヴェンションであったか

どうか、作品はわれわれに教えてはくれない。しかし *Troilus* にいたる作品の展開を通じて読みとることのできる詩人の心の内面的な展開は少くともそのように理解することを許すように思われる。

この現世の愛のうつろい易さの中に、つかの間の喜びをみいだしている人間、運命の女神の車輪のままにあやつられる人間、——それは詩人がいつも周囲の生活の中に見ている人たちであった。書物の中の人物ではなく、中世英国のいろいろな階級の人たち、この普通の男女の世界が *Troilus* を書き終えた詩人の前に突然のように開かれてくる。神の永遠の愛を深く知ったにちがいない *Troilus and Criseyde* の詩人に、現実の人間の世界がそのままに受容される世界——*The Canterbury Tales* の経験の世界が開かれてくる。今や詩人にとって宮廷愛の掟はほとんど何の拘束力をももたない、むしろそれは倒錯され、破られる。こうして、宮廷愛の ‘adultery’ の思想は、現実的な ‘marriage’ を中心とする男女の世界にとって代られる。Chaucer には、その初期の作品からすでに結婚という反宮廷愛の、健全な考え方がみられるが、それは、*Troilus* を契機として完全に詩人の心をとらえる。この結婚の問題を中心としてかつての宮廷愛の騎士も淑女もまた実際の世界の普通の男女も、人間として感じ、行動する経験的世界が現われる。それは人間の世界であるといってよい。詩人は広い視界にでたのである。

詩人にいかにしてこのような精神的な飛躍がなしとげられたのであろうか。この心的経験を説明することは、詩人をとりかこむ精神的な風土をどんなに強い想像力をもってえがいたにしても、不可能であるかも知れない。しかしわれわれには作品がある。この詩人の作品の形成と展開をその生涯・教養・経験との連関において考察し、その作品の読みを通して作品の語る言葉に耳を傾け、作品自らをして詩人の内面世界を語らせようとする。これが第一部におけるわれわれの試みである。

詩人は六百年も前の英国中世時代のヨーロッパ的な文化的環境に生きたが、彼が作品で語った言葉は、書物による経験であれ、現実の観察による経験であれ、ひろく詩人の経験的な言葉である。その中には現代のわれわれにも普遍的な意味を含蓄しているものがあるであろう。この詩人もまた、ある意味で、‘universal words’ で語っている。

I. 教養と経験を通して作品の形成へ

i. 言語的・社会的環境

(1) 言語的環境——ロンドンの英語

Geoffrey Chaucer は 14 世紀の半ば、1340 年 (とされている)¹ に多分ロンドンに生れた。² ロンドンの富裕な葡萄酒商人 John Chaucer が彼の父であった。母は Agnes といったがその旧姓 (maiden name) は知られていない。彼の生れた時期とその場所とは、この天才にとって ‘enviable’³ なものであったことは、Chaucer 自身は知らないことであった。しかし、まさしくうらやむべき位置を彼は英語に対して占めることになるのである。⁴

かの Norman Conquest (1066) につづく時代から Chaucer の活躍する時代までの英語は、McKnight の言葉を借りると、‘chaos’ の状態であった。南方の英語は、北方の人には理解されなかった。理解されないだけでなく、英語の地位は教養のない階級の人たちに限られていたのである。人から尊敬されるためには、Robert of Gloucester が記しているようにフランス語を知っていなければならなかった。⁵ しかし、そのような情けない状態に沈淪していた英語も次第に上層へ浮びでて統一への方角を辿るのである。混沌から統一へ。その中心となる場所がロンドン。人口約 4 万で、国

1. F. N. Robinson は Chaucer の生年を 1340 年よりややおそく 1343-44 年ごろと推論している (*The Works of Geoffrey Chaucer*, Second Edition, 1957, Introduction, xix)。さらに最近は、1345 年ないし 1346 年という説も現われている (P. F. Baum, *Chaucer: A Critical Appreciation*, 1958, p. 4)。この年代に従うとすれば、後述の年齢はそれに応じてずっとわくくなる。

2. Chaucer がロンドンに生れたということは確かではないが、彼の生涯の記録的な事実がロンドンとその近郊と密接な関係があり、彼が五十幾年をロンドンで過したことを示すに足るものがある (E. Rickert, *Chaucer's World*, p. 225)。

3. G. H. McKnight, *Modern English in the Making*, p. 19.

4. Nevill Coghill, *The Poet Chaucer*, Introduction: It might be said that of all his gifts except that of an original genius the greatest was luck. Born in an age when our language was in solution but at a temperature to crystallize, Fortune chose him as the nucleus.

5. “Vor bote a man conne Frenss, ne telth of him lute” —quoted from McKnight, *Modern English in the Making*, p. 4.